

ハイネセンの眠り姫

伊藤 薫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シュロモ・ミンツは病気のために同盟軍を辞め、一人息子のユリアンとの生活を守るため、ハイネセンポリスにある喫茶店でバイトとして働くことにした。その喫茶店で、ミンツは紅茶と本をこよなく愛する女性客に魅かれることになる。その常連の女性客は《眠り姫》と呼ばれていた。

▼Attention▼

時系列としましては外伝4巻になります。

目次

本編	I	1
	II	4
	III	7
	IV	10
	V	13
	VI	16
指揮官たちのダゴン星域会戦		
第1回：アンドラーシユ		20
第2回：クリスチアン・オレウインスキー		22
第3回：ラーヒズヤ・ムンガイ		24
第4回：ネイスミス・ウオード		26
第5回：ヒユール・エルステッド		28

本編

I

フリー・ラネット
自由惑星同盟・首都星ハイネセン。

シユロモ・ミンツはその日、たった独りで喫茶店《ハウス・カフェ・ブエナビスタ》をまかされていた。シフトは早朝からランチまでの8時間。午前中は店内がほぼ満席。亜麻色の髪をしたミンツは時どきハンカチで額の汗を拭きながら、店員として飲み物を作り、レジで代金を受け取り、ディスプレイケースからケーキを出した。テーブルを拭く暇がある時は狭い店内を歩き回っていた。

カフェは決して大きい店ではない。10人掛けの楕円テーブルが1つ。4人掛けの角テーブルが2つだけ。実際には10人余りが入るだけで満員になってしまう。小さな店舗でも、毎日さまざまな客が訪れる。

面接時に店長から聞いた話では、一番多い客はコーヒーや紅茶を飲みながら、隣の書店で購入した本や雑誌のデータを電子端末でゆつくり楽しみたいという人間だという。その評判にミンツは納得した。ただ、喉を潤すためにカフェに入って来る客も少なからずいる。

隣の書店はハイネセンポリスでも指折りの大型書店になる。地下のフロアから数えると全部で10のフロアがあり、全て本の売り場になっている。かなり広い本屋なので、欲しい本を探すのに疲れてしまう客も多いだろう。以前、ミンツも1人息子のユリアンの誕生日に絵本を買おうとして広い店内をだいぶさ迷ったことがある。

2時ごろ、店がようやく落ち着いてくる。ミンツはシロン産の茶葉で紅茶を淹れ、熱いうちに1杯飲んだ。相変わらず安っぽい茶葉だ。紅茶にうるさいミンツはそう思った。店主にもっと良い茶葉を勧めてみよう。

カップを流しに置き、カウンターによりかかって休憩する。2か月前までミンツは同盟軍に勤務していたが、ストレス性の胃潰瘍を患って今は一時退役している。今日のようにたった独りで店をまかされ

る日は36歳の病み上がりにはいささか重労働だが、次の仕事が見つかるまでの辛抱だと割り切っていた。

東の間の休憩時間に、ミンツは「フリープラネッツ・ヒストリカル・レビュー」を読み始めた。自由惑星同盟の歴史や軍事をテーマにした月刊誌である。ミンツはあまり歴史に興味が無かったが、母親がユリアンのためと評して定期購読を勝手に契約し、6歳の孫が見向きもしない雑誌を資源ゴミにするのが惜しくなり、自分が読むことにしたのだ。

最近ミンツが個人的に面白いと思っている記事を追いかけていた。記事のタイトルは「指揮官たちのダゴン星域会戦」。執筆者はヤン・ウエンリー。姓名の表記が名前の前に姓が来るE式になっている。

ダゴン星域会戦は宇宙歴640年—今から150年以上も前、同盟軍が銀河帝国軍を包囲殲滅して大敗させた戦いである。総司令官リオン・パオ中将与総参謀長ユースフ・トパウル中将のコンビによる勝利は小学生でも知っている話だが、彼らの手足となつて艦隊を指揮した5人の提督—ウオード、オレウインスキー、アンドラーシユ、エルステッド、ムンガイらの功績はあまり語られてこなかった。ヤンは諸提督の肖像を描き出すことを記事のコンセプトに挙げている。今回はアンドラーシユ提督に関する記事だった。

書籍なら電子端末で読むのが当たり前になりつつある中、ミンツが紙の雑誌を手取るようになったのは、ある女性客を特に意識するようになったからでもあった。きっかけは店で一緒にアルバイトとして働いている女子大生の一言だった。

「あの人、よく来ますね」

同僚が示す「あの人」はいつも店の奥にあるテーブルに座る常連の女性客だった。彼女は隣の書店で買った本を片手にカフェでゆったり過ごす客になる。ミンツも何回か接客したことがある。たしかに、他の客とはかなり雰囲気が違う印象を受けた。

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりですか」

「・・・紅茶。ミルクを1つ」

落ち着いた声で上品な喋り方をする。いつも必ず紅茶を注文する。「かしこまりました」

彼女の髪はショートヘアだった。艶々した藍色。年齢はおそらく20歳かそれくらい。来店時間は決まって17時以降。いつも落ち着いた色合いのスーツを着て、足元はズボンだった。足元は黒い短靴。

「お待ちせしました。ミルクティーです」

ミンツが紅茶をテーブルに持って行く頃には、たいてい買ってきたハードカバーの分厚い本に夢中になっている。小説や雑誌ではない。おそらくは学術書だろう。これはミンツの勝手な想像だった。詳しい分野までは分からなかった。紙のカバーも掛かっていた。あまり客が読んでいる本を覗き見るわけにもいかない。

今のご時世なら分厚い紙の本を夢中で読んでいる女性なら、どこでも興趣に尽きない話題になるだろう。ミンツも彼女が何を読んでいるのか興味こそあったが、しばらく彼女の読書傾向は謎のままだった。

II

ミンツは「フリープラネッツ・ヒストリカル・レビュー」を閉じた。休憩時間にヤン・ウエンリーによる「指揮官たちのダゴン星域会戦」を読み進めていたのである。今回の記事はオレウインスキー提督に関する記事だった。ひとつ息を吐いた後、ミンツは仕事に取りかかった。

夜の営業もミンツ独りで店を任せられることが増えてきた。カウンターの中から店内を見回した。奥のテーブルでは、相変わらず彼女が真剣な眼差しで行を追っている。時刻は午後8時近い。今は店内に他に客はいない。店員もミンツ独りだった。

彼女は普段、亡羊とした表情を浮かべている。ミンツには分かりにくかったが、同僚の女子大生いわく顔の造作は美しいという。くつきりとした二重瞼。綺麗な眼をしている。背丈は標準だが、猫背なので低く見える。本を読んでいるうちに表情が変わる。たいてい無表情だったりするが、時おり苦笑いを浮かべる。そもそも喫茶店に入って本を読む女性客は少ない。ある意味、かなり目立つ客だった。

「あれが、ソフィ君が言ってた人？」

店主が低い声で囁いた。ソフィとは一緒に働いているバイトの女子大生である。

「ええ」

「たしかに珍しいな。何を熱心に読んでるのやら」

「何だか難しそうな本でしたよ」

「チェックしたの？」

「たまたま見えちゃったんですが」

「ふうん、まあ何となく、頭は良さそうに見えるが」

彼女は長ければ3、4時間はぶつ通しで本を読み続けた。端から見ても、凄まじい集中力だった。あまり忙しくはない部署に配属されているのか、毎日定時を少し過ぎた頃には必ず店に来て熱心に本を読む。しばらく彼女の様子を観察していると、抜けたところも見えてきた。

その日も彼女は念力を発しそうな眼で買い込んだ本を読んでいた。カウンターの後ろにある棚にカップをしまうため、ミンツはほんの数秒、彼女から眼を離れた。店内を振り返った瞬間、ミンツは思わず「おや」と声を出した。彼女が眠っていたのである。

大胆にも大きな楕円テーブルの端に突っ伏して寝ている。左手の親指は今まで読んでいたページにはさまったままだ。閉じかけた本のすぐ隣にカップがある。眼が覚めた時に彼女が本ごとカップを払いのける場面が脳裏に浮かんだ。

カップを割られるのも嫌だ。それに、本や彼女の服が汚れるのもっと嫌だ。

ミンツは店内を見回してそっとカウンターから出た。幸い他に客はいなかった。店員は自分しかいない。ミンツは出来るだけ静かに歩み寄る。テーブルの左横に立ち、まずカップを取り上げる。20センチくらい先、ほとんど向かいの席くらいまで離して置いた。

とりあえずこれで起き抜けの事故は無くなったと思っただい。

《さて・・・次はどうしようか》

ミンツは考え込んでしまった。店内で寝てしまった客の対応は教わっていない。拙い経験を踏まえ、精一杯に機転を利かせて対処するしたら「お客様、お加減でも悪くされましたか」などと声をかけて、自然に起こすのが良いだろう。だが、ミンツはあえてそうしなかった。なぜか。

彼女はふうと息を吐いた。右腕を枕にしている。顔に服の皺が跡になりそうだが、気持ち良さそうに眼を閉じている。いささか無防備に思える。こちらを向いた時の彼女の寝顔があまりにもテレーズに似ていたから。1人息子のユリアンを遺して亡くなった妻に。

急に騎士道精神に目覚めたような感じだった。守ってあげたい。そんな気持ちになってしまった。そうは言っても、ミンツに出来ることは限られている。余計な音は立てない。他の客が入ってこないか見張る。せいぜいそんなものだ。そもそも他に客がいる喫茶店であたた寝なんて彼女もしたくはないだろう。店としてもあまり歓迎できないものではない。

《もう少しだけ・・・テレーズ、俺のわがままを許してくれないか》
ミンツは胸奥で亡き妻に詫びた。きつと勉強で疲れているだろう。あと少し、彼女に安らぎの時間を与えたかった。いや、そうではなかったかもしれない。自分自身が、ただ彼女を身近で眺めていたかっただけなのかもしれない。以前に店に来た時よりだいぶ長くなつた黒髪。相も変わらず艶やかな黒髪を独り占めしていたい。ミンツはそんなことをじくじくと考え続けていた。

III

彼女はその後、喫茶店で居眠りをした。ミンツが店に出ている時は決まってそうしていたように思える。さすがにテーブルに突っ伏して寝ることはしなくなつたが、様子を眺めていると、本を読んでいる眼がいつの間にかトロンとしてくる。やがて頭がコクンと落ちる。ああ落ちる。落ちる。その様子に、ミンツは思わずハラハラしてしまう。寝てしまう寸前で頭を持ち直したことも何度かある。その時は必ず大きな欠伸を一つ披露する。

「ちえっ、落ちなかつたか」

ミンツは棚から振り向いた。

「何が？」

「あつ、聞こえちやつてましたか」ソフィがペロツと舌を出した。「あの人、うつらうつらしてたんですけど、今日は居眠りしなかつたですね」

ソフィが言う「あの人」とは、彼女のことだった。今日も奥のテーブルに座つて分厚い本を読んでいる。

「あんまりお客さんをジロジロ見るものではないよ」

「そうですね、すみません。でもあの人寝顔がかわいくて」

ミンツは少しドキリとした。ミンツ自身、彼女の寝顔を楽しみにしているところがあつたのだ。ソフィの話は続いた。頭脳は明晰。ミンツは実際のシーンを見ていないので真偽は不明だが、彼女はある日に店主に「紅茶の茶葉を変えたでしょう。美味しかったわ」と言い、茶葉の銘柄をぴったり言い当てたという。

ミンツはまたもドキリとした。この店で出している紅茶は安っぽい茶葉から、ミンツが自分で選んだ銘柄に変えたばかりだった。亡き妻のテレーズは紅茶が好きで、自宅で出された紅茶を飲んで内にもミンツもいつしか紅茶にこだわるようになった。茶葉はテレーズがよく自分で淹れて飲んでいた一品だった。

ソフィはまだ話し続いていた。見た目には分かりにくい、彼女は美人で体型もいい。そんなお姉さんがふとした気のゆるみから天使

の寝顔を見せてしまう。

「いや、天使じゃないですね」ソフィが言った。「どちらかと言えば、お姫様です。眠れるカフェのプリンセスってところでしょか」

ミンツは思わずうなづいた。相手の熱量に気押されたような気分だった。彼女に対するソフィの話ぶりにあまり同意できなかったが、まもなくミンツも彼女が持つ新たな一面を目の当たりにした。

翌日の夜、ミンツは老人客に紅茶を注文される。慌てて読んでいた「フリープラネット・ヒストリカル・レビュー」を閉じる。「指揮官たちのダゴン星域会戦」はムンガイ提督に関する記事だった。ひと息ついた後、老人にストレートの紅茶を給仕した。

老人はまずティーカップに鼻を近づけて香りを嗅いでいる。その後、口に含んで実際の紅茶の味を楽しみながら言った。

「うん。これはポロンナルワのマツキャロン茶園の茶葉だね。非常に甘みがある」

「私には、どこか懐かしい香りがします」ミンツは言った。

「懐かしい？君、この茶園に行った経験は？」

「ええ、あります」

老人は銜学的な態度を取った。

「その時に同じ物を飲んだじゃないのかね？私はあの星にある大学で教えてたんだが、向こうの友人が紅茶はタミルに限ると言ってたよ。最近ハイネセン産の紅茶もあるが、私は本場の茶樹しか認めないね」

彼女がいきなり会話に加わった。

「無知な人間は、自分から無知をさらけ出すものね」

老人はムツとして訊き返した。

「私が無知だというのかね？」

ミンツは右手に持ったティーポットをテーブルに静かに置いた。彼女と老人が飲んでいる紅茶はそのポットから注がれたものだった。彼女はよどみのない口調で続ける。

「このタミルティー、たしかにマツキャロン茶園のものよ。でも、その茶樹はハイネセンから持ち込まれたのよ。ちなみに、ハイネセンで作

られた紅茶が50年前にフェザーンで開かれた品評会で最優秀賞を取ってる。本当の紅茶好きは産地に関係なく、その味を楽しむ。そうでしょう?」

彼女は老人に静かな視線を向け続けた。

「あなたは紅茶が好きなの?それとも紅茶に詳しい自分を誰かに認めてもらいたいのか?ご自慢の友人にぜひ聞いてみたいものです」

老人は不服そうに鼻を鳴らした。黙って紅茶を一気に飲み干すなり、代金の硬貨をテーブルに投げ捨てて店を出て行った。ミンツはテーブルを片付け始める。彼女がミンツに声をかけてくる。

「懐かしいという感覚は良いですね」

「ありがとうございます」

実際、ミンツには懐かしかったのだ。ポロンナルワのマツキヤロン茶園は新婚旅行で訪れた場所だった。ミンツは続けて言った。

「紅茶、お詳しいんですね」

彼女は分厚い本に眼を落としたまま堪えた。

「紅茶が好きなだけです。嫌いなのは、権威を笠に着て詳しいふりをする人間です。全く信用できない」

「その通りかもしれませぬ」

「この世で信用できるのは、紙の本と紅茶だけですな」

ミンツは彼女の言葉に思わず笑ってしまった。

ミンツの勤務は喫茶店の前にある花壇の水やりから始まる。店主の夫人が植えた草花に水をやり、雑草を抜き、落ちた葉を集めてゴミ袋に入れる。ゴミ袋を集積所に置いた時、背中に声をかけられる。

「ミンツ大尉じゃないのか」

「キャゼルヌ中佐」

アレックス・キャゼルヌが道端に佇んでいた。以前はミンツも着ていた同盟軍将官の軍服姿。白い五稜星のマークがついた黒いベレーを被っている。襟元は黒いネクタイに同色のジヤンパーを着て、足元は黒い短靴を履いている。

キャゼルヌはミンツが同盟軍で最後に勤務していた統合作戦本部で、直属の上司に当たる人物だった。年齢は27歳。相手は年下だが、階級は上だったために思わず軍に所属していた頃の名残から一礼した。かつての上官は口元に苦笑を浮かべる。

「軍を辞めた後、こんなところで働いてるとはな」

「次の勤め先が見つかるまでの辛抱ですよ」

「お子さんは元気か？まだ小さかっただろう」

「まあ何とか。外は寒いですし、お店に入りましょうか？」

キャゼルヌは独り言のように話した。

「いや、ちよつと冷やかしに來ただけだ。おれの知り合いが面倒を起こしたっていうから、どんな場所か気になっただけだ。なに、貴官には関係ことさ。じゃあ」

キャゼルヌは街の雑踏に消えていった。ミンツは道具を片付けてから店に戻った。休憩時間は「フリープラネッツ・ヒストリカル・レビュー」を読む。今月号の「指揮官たちのダゴン星域会戦」はウォード提督に関する記事だった。

その日も彼女はいつも通り、17時ごろに店に來た。時間が経って客数が少なくなり、店にミンツと彼女しかいなかった。

短い悲鳴とカチャンという冷たい音を同時に耳にする。

ミンツは反射的にカウンターから顔を上げた。彼女が水の入った

グラスをテーブルに倒していた。またうとうととしていたのだろうか。ミンツはすぐに未使用の台拭きを持って駆けつけた。

「大丈夫ですか？お客様」ミンツは言った。

彼女は左手でグラスを持っている。右手で辺りにあった物をどけていた。どうやらグラスそのものは割れなかったようだ。

「あの、ごめんなさい。メニュー、濡らしちゃって」

「それは構いません。お洋服とか、ご本にはかかりませんでしたか」

「ええ、私は・・・あ、ちよつと本が」

「失礼いたします」

ミンツはまずテーブルの水だまりに台拭きにかぶせた。これで被害が広がるのは防げるだろう。本はレジで掛ける紙カバーが濡れていた。ミンツは紙カバーを剥がした。PP加工を施した本体カバーは無事だった。「PP」とはポリプロピレンの略で濡れや汚れに強い表面加工のことである。

「中のページは大丈夫でしたか？」

ミンツは本を差し出した。彼女は本を両手で受け取る。ミンツはその時初めて、本のタイトルを意識して読んだ。

「老将は語らず」。著者はアルフレッド・ローザス。著者は43年前に第2次ティアマト会戦で同盟軍を完勝に導き、自ら戦死したブルース・アッシュビー大將が宇宙艦隊総司令官を務めていた頃に総参謀長の重責を担った人物である。退役後にローザスが記した回顧録は優れたノンフィクションに贈られる賞を受賞している。

若い女性が老提督の回顧録を読むとは。ミンツには少し意外な組み合わせに思える。彼女は表紙やページをパラパラとめくった後、小さくうなづいた。

「中身は大丈夫です。それにもう、大体読んでしまったし」

「同じ本を以前に読んだことがありますか、内容が小難しくて」

「まあ自分にとっては読むのが、仕事みたいなものですから。それに・・・」

その時、彼女は笑みを浮かべる。本を読んでいる時の顔とも、もちろん居眠りをしている時の顔とも異なる。芯の強さというか、揺るぎ

ない意志の強さのようなものをちらりと垣間見せた。ミンツは思わずそんなことを感じた。

「ここだと、すごく集中して読めるんです。いつも長居しちゃってごめんなさいね。すごく迷惑かなと思ってるんですが」

ミンツは首を横に振った。

「そんなことありません。どうぞ・・・ごゆっくりなさってください」

実際、ミンツは迷惑だと思っていなかった。喫茶店に長く過ごしている客でたった1杯のコーヒーで粘る人も多いが、彼女は3杯から4杯、ちゃんと紅茶を注文する。

「じゃあ、お言葉に甘えて、もうちよつとだけ・・・あと、紅茶をもう1杯」

「はい、かしこまりました」

その日はそれが5杯目だった。

ヤン・ルイタン（楊瑞丹）は10時過ぎに眼が覚めた。今日は非番だった。昨夜に降っていた雨の音はもうしない。ベランダから何か聞こえてきた。隣の部屋から4人で住んでいる移民の若い女たちが姦しく何か話し込んでいる。この曇天の下、洗濯物を外に出すか出さないかで揉めているらしい。

ベッドから起き上がってブラインドを上げる。狭いベランダに面した窓を開けた。白い靄がハイネセンポリスの街を低く覆っていた。隣に建つ雑居ビルの「個室サウナ姫百合」の大きな看板の下半分がぼやけて見えるほどだ。3階のこの部屋まで靄は届いていない。湿気と排気ガスの臭いがいつもより濃く昇ってきていた。

ヤンは2か月前まで勤め先の独身寮に住んでいたが、そこを追い出されてしまった後、ハイネセンポリスの南―サウスエンドと呼ばれる地域の古いアパートに引っ越した。

サウスエンドは日雇い労働者や移民が多く住んでいる貧民街であり、治安はあまり良くない。同僚や先輩らは「21歳の若い女が独りで棲むような町じゃない」と注意してきたが、当の本人が家賃の安さだけで部屋を決めたことに呆れていた。

「モーニー・ルイちゃん」

いきなり隣から声をかけられる。部屋の仕切りから、女が無理やり顔突き出して手を振ってくる。髪をひつつめて結び、浅黒い美しい顔に丸い眼がおどけている。シンシアという名前の娘だった。ヤンも手を振って答える。シンシアは外で逢っても、まるで子犬のようなじゃれ方をする可愛い子だった。

「ゲンキ？」

「元氣よ」

ヤンはシンシアに手を振ってベランダから離れる。TV電話ワイジホンの留守電を確認しようと思った。寝室を出てリビングの電話が置かれた小卓に歩み寄ったが、床に積んだ蔵書の山を足の小指で蹴飛ばして崩してしまった。

痛みで眼尻に涙が浮かぶ。いい加減、新しい本棚を買わなければならない。ヤンはため息を吐いてから本を積み直した。新しい本棚を買ったところで床に所狭しと置かれた本を全部入れるだけで、すぐに埋まるだろう。

留守番電話が1件入っている。ヤンは再生ボタンを押した。

《ヤン・ウエンリー（楊文里）様、こちら「フリープラネッツ・ヒストリカル・レビュー」編集部のフラナガンです。まだ来月分の原稿が届いていないようですが、原稿の締め切りは・・・》

「フリープラネッツ・ヒストリカル・レビュー」は自由惑星同盟の歴史や軍事をテーマにした月刊誌であり、楊文里はヤンがその雑誌に記事を寄稿する際に使用しているペンネームだった。ペンネームは実在の人物からあやかっている。ヤンの父方の家系に連なる遠い親戚に当たる本物の楊文里は何冊か歴史を題材にした本を著したが、父親のタイロン曰くその本は大して売れなかったそうである。

朝からうんざりする話を聞いたな。ヤンはそう思った。

子どもの頃から歴史が好きだった彼女は学問として専攻し、あわよくばそれで生業とすることを夢に見ていた時期もあった。だが父親の死で人生が変わり、今は食べるために歴史と関係ない仕事を本業とし、副業で雑誌に投稿するフリーライターという身分である。

記事の題材は懇意にしている編集長の計らいで、ヤンの自由裁量で決められるが、締め切りは当然やって来る。「指揮官たちのダゴン星域会戦」は先月号のエルステッド提督に関する記事で終了した。

陽気な気分になりたかった。ヤンはFMをつける。ラジオからジャズ・フュージョンが流れてくる。勝手に節をつけて歌いながら着ていたTシャツとショーツを脱ぎ、タオルと一緒に洗濯機に放り込んだ。シャワーを浴びた。屈託を思いつきり身体から洗い流してしまいたい。

髪を洗い、丁寧にリンスをする。シャワーから出る。お気に入りのバスタオルで身体を拭いた。水滴を拭きとる。ジェルバウムを全身に塗り、髪にはムースをつける。身体に馴染んだTシャツを頭から被り、ジョーンズを履いた。ようやく気持ち落ち着いてくる。

喫茶店で原稿を書こう。最近の行きつけはハイネセンポリスの中心部―エルム街にある「ハウス・カフェ・ブエナビスタ」だった。そうだ。そこで原稿をやろう。善は急げ。執筆に必要な参考資料を数冊、ノートPCをバックパックに入れて部屋を出て行った。

「こんなところで何をしてる?」

ノートPCから顔を上げたヤンは見覚えがある相手の顔を一瞥する。

「貴方こそ」

ヤンは不機嫌な声を出した。お気に入りの喫茶店でいま一番会いたくない相手に会ってしまった。士官学校の先輩キャゼルヌが向かいの椅子に座った。テーブルの上にあるフィッシュ・アンド・チップスは半分近く残っている。3杯目のミルクティーはすでに空になっている。キャゼルヌは後輩の貧弱なランチを見て呆れたように言った。

「食欲が無さそうなのはいつものことか」

「あまり太りたくないんです」ヤンは言った。「先輩も非番ですか?」

キャゼルヌはうなづいた。チノパンに涼しげな色合いのワイシャツを着ている。

「お相手はどうしたんです?」

花の独身エリート士官アレックス・キャゼルヌ中佐はただいま恋愛中で、相手は上官の娘だという。バイトで働いている女子大生のウェイターが注文を取りに来た。ヤンは4杯目のミルクティー、キャゼルヌはブラックコーヒーを注文する。ウェイターがテーブルを離れた後、キャゼルヌは口を開いた。

「オルタナスとは今日、デートの約束をしてない。お前さんに用がある」

ヤンは苛立った声を出した。

「今は原稿の締め切りに追われてるんで、忙しいんですが」

「原稿って何だ? ああ、雑誌に送り付けてる怪文書か」

「怪文書じゃありません。雑誌に寄稿する記事と云ってください」

「俺にとっては、どっちもあまり違いはないがね」

ヤンは相手を睨みつける。キャゼルヌはテーブルに置かれた数冊の本を見ながら言った。

「今度は何の題材について書くんだ？」

「第2次ティアマト会戦です」

キャゼルヌは少し虚を衝かれたような表情を顔に浮かべた。

「アツシユビ―提督か。それはちようど良かったな」

ヤンは訝しげな視線を相手に送る。何がちようど良いのか。キャ

ゼルヌはヤンの疑問に構わずに言葉を続けた。

「お前さん、やってくれたそうだな」

「急に何ですか？」

「国立自治大学の学長は知ってるか？名前はエンリケ・・・」

キャゼルヌは携帯端末を取り出した。数秒の間に何か調べた後で話を続ける。

「エンリケ・マルチノ・ボルジエス・デ・アランテス・エ・オリベイラだ」

ヤンは首を横に振った。

「そんな舌をかみ切りそうな名前の人物は知りません」

「お前さん、その学長に喧嘩を売ったそうだな。この店で紅茶のことでいっぱしに講釈を垂れたそうじゃないか」

「ああ、あのお爺ちゃんですか。そんなこともありましたね」

ヤンは老人の顔を思い出した。国立自治大学といえば、以前に左派系のメディアから「政府の官僚を育成するための施設」と揶揄されていた。老人の雰囲気もその学長である点からうなづける。指先まで自信と優越意識が充満しているような人間で、ひたすら不快だったことだけが印象に残っている。キャゼルヌはため息を吐いた。

「教授に説教した女はこの店の常連。その常連がお前さんだと知った時の俺の気持ちは分かるか」

「後を尾けてたんですか？それじゃストーカーですよ、先輩」

「茶化すな」

今度はキャゼルヌがヤンを睨みつける番だった。険悪な雰囲気は犬も食わない夫婦喧嘩そのものだった。不意にその雰囲気が変わる。2人は男性のウェイターに声を掛けられて顔を向ける。

「お待たせしました。コーヒ―とミルクティーになります」

「ミンツ大尉か」キャゼルヌは言った。

ミンツは苦笑を浮かべる。

「大尉はやめてください。もう軍は辞めたんですから」

「知り合いだったんですか？」ヤンは言った。

「彼は俺の部下だったからな。軍に入る前は会計士だったよな」

ミンツはうなづいた。キャゼルヌの言う通りだった。軍ではその経歴を人事にかわれたのか、一貫して補給や通信など後方勤務に配属されていた。今はこの喫茶店でバイトに近い身分だが、いつかは会計事務所で働くつもりである。そのことは明かさなかった。

「良いですねえ」ヤンは言った。「自分も早く辞めて優雅な暮らしを送りたいですよ」

「いま辞めても勤続年数が短いから、年金は貰えんぞ」

「分かってますよ」

ミンツが口を挟む。

「常連さんがキャゼルヌ中佐のお知り合いだとは……」

「ああ、大尉に紹介しよう。名前はヤン……」

「ヤン・ウエンリーです」

ミンツは驚いた表情を浮かべる。

「ヤン・ウエンリー？『フリープラネット・ヒストリカル・レビュー』で記事を書いているライターの方ですか？」

「ええ、そうですけど……」

「いやあ、嬉しいな。自分は貴方の記事が大好きでよく読んでるんです。そうだ、雑誌を持ってきてるので、サインをお願いしてもいいですか」

ヤンはうなづいた。ミンツは慌ててカウンターの奥に走って行った。キャゼルヌはその様子を見ながら言った。

「お前さんの怪文書にファンがついてるとは思わなかったな」

「怪文書じゃありません。記事と言ってください」

「俺にとっては、どっちもあまり違いはないがね」

宇宙歴788年。ヤン、キャゼルヌ、ミンツの3名が織りなす人間模様は後世の歴史から見れば、ある意味で1人の少年の運命を決定づ

けたと言えるだろう。無論、3名にそうした事実を知る由も無かった
のである。

指揮官たちのダゴン星域会戦

第1回：アンドラーシユ

アンドラーシユは一風変わった名前を持ち主である。現代に遺されている同盟軍の公式文書でも下の名前である「アンドラーシユ」しか記載されておらず、誰かに姓名を尋ねられても必ず名前しか名乗らなかった。一説には、本当の姓名が銀河帝国で没落した有名な貴族のそれであり、フェザーン経由で亡命した経歴を隠そうとしていたとも言われている。

彼は万事が慎重すぎる人物だった。三次元チェスにせよ演習にせよ、とにかく自分の手駒が全て揃ってから、勝利を確信できないことには決して動かなかった。あまりの慎重居士ぶりに、寡黙で知られるムンガイでさえ、2人で三次元チェスを指している時にイライラして声を荒げたことがあるぐらいだった。幼い頃、自宅の近所で知り合った女性を生涯の伴侶とする際も、相手と双方の家族を10年以上やきもちさせた男である。なお、結婚後は妻の姓を前につけるE式風にリゲティ・アンドラーシユを名乗った。

・・・アンドラーシユ率いる第2艦隊では、指揮官を不安視する将兵は多かった。戦闘日誌を確認してみると、確かに慎重居士な彼らしからぬ荒っぽい行動や言動が目立つ。特に7月18日における行動がひととき異彩を放っている。

この日の正午、同盟軍と帝国軍が正面から激突した。双方とも奇策を弄さず、帝国軍は凸陣形、同盟軍は凹陣形をとって砲戦を開始する。帝国軍は味方の損害に構わずひたすら前進を続けたが、その進撃を食い止めたのは第2艦隊だった。急進する帝国軍の右翼に砲火を浴びせたのである。帝国軍はこの側面攻撃が壮大な包囲殲滅戦の一環であると危惧したため、前進を停止して艦列を立て直した。後日、アンドラーシユはこう論評した。

「あのとき帝国軍は側面の損傷など意に介さず、前進をつづけるべきだったのだ」

彼は発言の真意を明かさなかったが、帝国軍の勝利を望んだと思われるような発言に国防委員長ヤングブラッドは苦言を呈した。さらなる問題は同日の総司令部に対する定時連絡でも起きた。陰気な総司令部の雰囲気嫌気が差した彼はリン・パオとトパロウルに食ってかかったのである。

「貴官らは辞表を用意されよ。本職は遺書を懐中にするのみ」

この放言は瞬く間に第2艦隊に知れ渡った。艦隊司令官と長年の付き合いがあった副司令官のホルティ大佐はついに指揮官の気がふれたと思いい悩み、頭を抱えた。

その実、会戦中のアンドラーシユは苛立っていたのである。会戦に出征する前日、彼は幼馴染に求婚を申し出た。彼にとっては熟慮を重ね、考えうる限り最良の時を選らんだつもりだった。彼は相手が当然、申し出を了承してくれると思っていた。だが、その予想はあっさり裏切られる。彼女から返事を待つて欲しいと言われたのである。

会戦では指揮官個人の思いに構わず、アンドラーシユ自身に決定的な瞬間が訪れる。同盟軍は同月19日、G16宙域で「爆発的攻勢」に転じたのである。

7月21日、第7艦隊（ウォード中将）に左翼を衝かれた帝国軍が第2艦隊によるめきかかった。突撃するべきだった。そして彼は突進を命じた。勝利を確認した彼は黒ベレーを空中高く放り上げ、戦艦「マライタ」の艦橋で指揮官席から立ち上がって声を張り上げた。《猛将》アンドラーシユが誕生した瞬間だった。

『第一命令、突進せよ！^{ゴー・アタック}第二命令、突進せよ。^{ゴー・アタック}第三命令、ただ突進せよ！^{ゴー・アタック・オンリー}』

・・・アンドラーシユは僚友たちの中で最も長く軍に留まった。宇宙歴642年に大将に昇進。4年後、ウォードの後任として宇宙艦隊司令長官に就任する。就任して早々にオレウインスキーに關係する問題の対処に追われるも、その後は帝国軍を相手に勝敗を重ねる。652年、元帥号を授与された。彼は《猛将》という綽名を体現するかのよう、対帝国の最前線に立って寧日なき歳月を送った。

第2回：クリスチアン・オレウインスキー

クリスチアン・オレウインスキーは典型的な叩き上げで、艦隊司令官にまで登りつめた人物である。戦闘指揮は猪突猛進そのもの。戦いぶりは献身的であり、短期決戦の破壊力なら他のどの提督よりも勝った。だが粗野な下士官型の前線軍人の例に漏れず、苦境では精神論をよく唱え、部下に対しては鉄拳制裁も辞さない姿勢は性格が正反対だった。パロウルの不興を買った。2人の反目はダゴン星域会戦の緒戦時に早くも表面化した。

7月16日、帝国軍の縦深陣に誘い込まれて挟撃されたオレウインスキー率いる第5艦隊は早々に兵力の3割を喪失した。この時にリン・パオがオレウインスキーの失策を一言もとがめなかったのは有名な話だが、その裏でパロウルはハイネセンの国防委員会にオレウインスキーの更迭を要請する通信文を出そうとしていた。

結局、オレウインスキーは更迭されなかった。幕僚のオルトリッチが総参謀長を宥めて思いとどまらせたと言われている。オルトリッチ自身もオレウインスキーに対しては良い感情を持っていなかったが、指揮官更迭による第5艦隊の動揺を恐れた末の行動だったと回想録に記している。だが、この時の行動が果たして最良の選択だったのかとオルトリッチは生涯悩むことになる。

7月19日、同盟軍は「爆発的攻勢」に転じる。その攻勢に最も乗じたのは無論、オレウインスキーだった。同盟軍は勝利を収めたが、第5艦隊は最も大きな損害を出して、会戦後も艦隊の再建に最も時間がかかってしまった。

・・・オレウインスキーは会戦に参加した指揮官の中で唯一、戦功による昇格はなく、艦隊司令官からも降ろされてしまう。それでも彼は軍を辞めなかった。いくつかの閑職に回された後、再び艦隊司令官に返り咲くまでに10年近い歳月を要した。

艦隊司令官に再び就任した後のオレウインスキーに関しては、軍内で不名誉な噂が常につきまとった。民間人や捕虜殺害の嫌疑が一度ならずかけられている。特にオレウインスキーを悪名高く印象づけ

た事件は宇宙歴649年、惑星ビルケナウで現地人殺害の指揮を執ったというものである。

惑星ビルケナウはイゼルローン回廊近くにあり、旧帝国領だった。オレウインスキーは第10艦隊を率いて周辺の星系から帝国軍を放逐し、ビルケナウに駐留基地を建設するべく惑星に降下した。彼は第10艦隊司令部を母体にした占領軍政府を設立し、元帝国臣民に対する宥和政策を積極的に取った。だが現地の反同盟運動は熾烈をきわめ、衝突は避けられなかった。現地人と占領軍兵士の双方に死者が出るほどだった。

衝撃的なニュースはフェザーンからもたらされた。ビルケナウで駐屯基地に使用する土地の接収に反対した村ーリディツェで住民数万人が虐殺されたという報道だった。ビルケナウの人権オンブスマンによる告発で判明した。なお、この告発には占領軍司令部で作戦参謀を務めていたコ克蘭中佐が関係していた。良心の呵責に駆られたコ克蘭は軍を辞め、上官の告発に至ったとマスコミに話している。

本件に関して幾度かの簡易軍法会議が開かれた。だが、いずれも証拠不十分またはその事実なしとして無罪判決が下されている。批判は噴出した。一般市民から政府寄りとみなされているマスコミも、身内に甘い軍が戦争犯罪人を庇っていると紙面に書き立てた。

652年、オレウインスキーは「サラキア星域会戦」において戦死する。享年41歳である。この戦いにおけるオレウインスキーの指揮は精彩を欠き、一方的に帝国軍に翻弄されて完敗を喫した。戦死後も階級は中将のままだった。殉職による二階級特進の措置は取られなかったのである。

・・・オレウインスキーは私人の立場では、好人物で篤志家だった。後に残された妻や3人の娘たちには優しい父親に過ぎなかったとされる。自分の給与から少額を毎月、児童保護施設に寄付していたことも判明した。遺産も総額の半分を福祉事業に贈与することが遺書に定められており、彼の人物像は現在でも毀誉褒貶が相半ばしている。

第3回：ラーヒズヤ・ムンガイ

ラーヒズヤ・ムンガイは実に地味な男だった。その用兵も人柄を現すように手堅く、大崩れするということが無かった。迷宮と評されるダゴン星域において、無秩序な帝国軍の反撃に他の提督たちが圧されている中、ただ独り戦線を維持して、ついには味方に逆転をもたらす契機を作ったことが一度や二度ではない。

寡黙で性格は堅苦しかった。酒席で冗談が弾んで僚友が笑った時でも、ニコリともしなかったという。彼がある時に他人から聞いたという艶っぽい話を披露した。なかなか面白い話だったので、僚友たちは盛大に笑った。笑い声が収まった時、彼は真剣な表情でこう言った。

「今の話はどこが面白かったんだ？」

周囲は返答に窮してしまった。部下に対しても上官に対しても、リップサービスをするような男ではなかったために双方から人気は無かった。だが、リン・パオはこの堅苦しい男を最も信頼していたかもしれない。オルトリッチは回想録にそう記している。トパロウルは対照的に、決して好いてはいなかったようである。

ムンガイはトパロウルから麾下の第8艦隊より3000隻を割いて、オレウインスキーの第5艦隊に移すよう命じられる。緒戦時に被った損失の穴埋めを求めた形だが、彼はにべも無い返答をする。

「わが艦隊に遊軍はありません」

トパロウルは苦い表情を浮かべる。

「なぜだ？」

「ここで3000隻も供出しては、わが艦隊の前線が維持できません」
「貴官の3000隻がないと、全軍が崩壊する恐れがある。貴官がその責任を取るのか」

「責任はともかく、そのような要求をなさる理由をうかがいたい」

トパロウルが声を荒げる。

「そんなことをいちいち説明する時間はないぞ！」

ムンガイは眼を細めて総参謀長を睨みつける。凍りついた会議室

の空気を和らげたのは、オルトリッチだった。第8艦隊から供出する3000隻を第5艦隊ではなく、総司令官直属に移す名目にする案を示したのである。この措置にムンガイも矛を収めた。彼が大人げなく命令を拒否したことについて、オルトリッチは無理も無いだろうと回想している。オレウインスキーに自分の「虎の子」を奪われて無為に消耗させられることに対する個人的な反目もあってもおかしくない。

・・・ダゴン星域会戦は7月21日にクライマックスを迎える。この日にトパロウルはある懸念を胸中に抱えていた。包囲網が兵力の最も薄い箇所（第5艦隊）で突破されれば、同盟軍の勝利は無くなるだろう。実際の戦況も当初はそのように推移したが、戦艦「サンタイサベル」の艦橋全体を覆う恐怖は次第に解消した。第8艦隊が第5艦隊の戦線を補強して包囲環をさらに強化したのである。トパロウルは後に「ムンガイの行動が同盟軍の勝利を決定づけた」と記した。

・・・冷静沈着なムンガイは宇宙歴642年に大将に昇進する。昇進の辞令を受けても別に嬉しそうな素振りを見せなかった。宇宙艦隊総参謀長から同艦隊司令長官を歴任して、655年に統合作戦本部長に就任した。661年、元帥号を授与された直後に軍を退役する。

・・・統合作戦本部長としての彼は優れた実務能力と筋が通った人事を行った。当時の同盟軍は帝国軍と同様に、白系の人種が要職に就きやすい環境だったが、縮れ毛と濃い肌色の皮膚を持つムンガイは能力さえあれば、有色人種の将官も積極的に登用して人種間の不均衡を無くそうと奔走した。今では「名本部長」と称されるに足りうる業績を上げたとして評価されている。

第4回：ネイスミス・ウオード

ネイスミス・ウオードは一言といえば「優等生」である。士官学校を首席卒業した後は同盟軍内の要職を歴任し、階級も順調に駆け上がった。周囲からいずれは同盟軍総司令官や総参謀長の就任も間違いないと思われるが、極度のストレスから神経性の心疾患を患って長期休養を余儀なくされた。

・・・帝国軍を迎撃するに当たって、同盟軍統合作戦本部で総司令官と総参謀長の人選が行われた。ウオードは当然、対象者リストの最上位に名前が挙がっていたが、彼の健康を不安視した統合作戦本部長ピロライネン大將は総司令官にリン・パオ、総参謀長にトパロウルを推薦した。最高評議会議長のパトリシオはこれを認めた。ウオードは一介の艦隊司令官に甘んじることになり、順風満帆に思えた彼が味わった最初の挫折だった。

周囲の見方もさることながら、ウオードは名言せずともリン・パオを特に意識していたようではある。有名な一幕はダゴン星域会戦の緒戦時に早くも現れた。第5艦隊が敗退した後に開かれた作戦会議で、リン・パオはオレウインスキーの失策を一言もとがめずにこのように発言した。

「戦術レベルでの敵の力量はよくわかった。正面から戦っては出血量が増えるだけだ。戦いはこのさい、なるべくさけた方がいいな」

ウオードが眉をしかめて総司令官を見た。

「戦わなければ、なるほど、負けはしないでしょう。しかし勝つこともできませんぞ。敵が決戦を断念して撤退してしまったら、どうなさるのです?」

「それでいいのさ。吾々の目的は勝つことではない。負けないことだからな。敵の侵入を阻止さえできればいい。なぐりつけて追い返さなくても、敵が腹をへらして家へ帰ってくれば重畳きわまりないさ」

ウオードは厳しい視線を相手に送った。水色の瞳は総司令官の覇気の欠如をはげしく非難していた。リン・パオは鋭利な視線を平然と

受け止めている。ウォードは後に自分の非礼に対する総司令官の器の大きさに感服したと語っている。総司令官と付き合いが長いトパロウルなら「あれは鈍感なだけだ」とまぜつかえしたかもしれない。「司令官に一つうかがいたいものですな」ウォードは言った。「勝つことと負けないこととは、どこかどうことなるのです？」

リン・パオは悠然と答えた。

「辞書をひくんだな。他人に訊いてばかりいたんじゃないや勉強にならんよ」

この時、ウォードは無言で部屋を引き下がったとされる。だがリン・パオの視界から消え去るまでに床を3回、ドアを1回、音高く蹴りつける音が聞こえた。オルトリツチは回想録にそう記している。

・・・ウォードはダゴン星域会戦後も、第一線の指揮官として帝国軍と戦い続けた。宇宙歴642年に大将に昇進、646年に宇宙艦隊司令長官に就任する。その後2年ほどは大きな会戦は想起せず、648年に無傷で退役する。まだ43歳だった。1年間の休養の後、伝統ある私立大学の学長に就任する。大過なく1期3年を務めた後、生地である惑星パラスの知事に立候補して、1期4年を過ごして中央政界に転じた。660年に最高評議会で国防委員長の座を仕留める。同時に、過去の武勲の数々に対して元帥号を授与した。

：：私人としてのウォードは多芸な男だった。文学や詩を嗜み、ピアノを弾き、風景画を描いて美術展に入選したこともある。心臓を患う以前までは夏は登山、冬はスキーを精力的にこなした。トパロウルはウォードを「何をやらせても、その道のプロになれる腕前を持った男」と評した。この言葉にはやや苦みを込めた好意が滲み出ている。多才多芸に甘んじて真の一流に達するための執念に欠けた男を惜しんでいるようであった。

第5回：ヒュー・エルステッド

ヒュー・エルステッドは小気味のいい戦術家だった。与えられた戦術的課題をよくこなして同盟軍の勝利に貢献した将星の1人として、ダゴン星域会戦では逃げる敵を追撃して戦力を削ぐ戦法に輝きを見せた。なお同盟軍では艦隊司令官に中将がその任に当たるとされているが、エルステッドは階級が少将だった。階級が少将のまま艦隊司令官に就任した経緯は以下のようになっている。

・：出征前、エルステッドはハイネセンから急きよ呼び出された。辺境の惑星レムスで警備任務に就いていた彼は通常は9日かかる日程を1週間で、ハイネセンに到着した。統合作戦本部ビルで彼を待ち構えていたのは、統合作戦本部長ビロライネン少将と国防委員長ヤングブラッドだった。

2人はエルステッドを呼び出した経緯を説明する。エルステッドはダゴン星域会戦に参加する第4艦隊司令官に推薦されていた。前任者のロバートソン中将は極度のストレスで心身ともに憔悴しきつてしまい、戦局に対して悲観的になっていた。

「ロバートソン提督は解任せざるを得ない」ビロライネンは言った。「ところで、君は今回の出征をどう思うかね？」

「自由惑星同盟を守り抜くか、それで死ぬかでしょうかね」

2人はエルステッドをじつと見つめる。しばらく経った後でヤングブラッドは「その通りだ」と答えた。こうした経緯で、エルステッドは少将で第4艦隊司令官に就任した。出征のわずか4日前の出来事だった。

おっとり刀でダゴン星域会戦に臨むことになったエルステッドは艦隊の錬成と自らの流儀を部下に教え込むため、常に最前線で連闘を重ねるよう指揮を執った。諸戦で帝国軍に挟撃された第5艦隊の窮地を救った敢闘ぶりから、リン・パオはエルステッドに特命を与えた。「わが軍に地の利があるのと言うまでもない」総司令官は言った。「それを最大限に生かす手立てを考えてほしい」

エルステッドは総司令官の特命に応えるため、検討を重ねた。ダゴ

ン星域は三重の小惑星帯が太陽を取り囲んでいる。太陽は壮年期だが活動が不安定で、電磁波の発生量もきわめて多い。そこで彼が取った手法は自ら率いる第4艦隊の編制を変えることだった。小回りを利かせるため、艦隊の規模を半個艦隊まで縮小して戦艦などの重装甲艦を他艦隊に回す一方、他艦隊の軽巡洋艦や電子工作艦を第4艦隊になるべく集積させる。リン・パオは彼の提案を認めた。

・・・7月21日、同盟軍の攻勢はクライマックスを迎える。この日におけるエルステッドの功績はトパロウルが後に認めている。第4艦隊は帝国軍の側面と後背を「ねずみ花火のように飛びまわって」、その通信と心理を攪乱した。エルステッドが取った作戦とは軽巡洋艦で繰り返しヒットアンドアウェイを行って敵戦力を漸減しながら、電子工作艦で偽電波を流し続け、あたかも巨大な艦隊に包囲されているかのように見せかけるといったものだった。

・・・宇宙歴654年、リン・パオは元帥号を授与して軍を退役する時、エルステッドも同じ時期に軍を退役した。退役時の階級は中將だった。その後は軍需企業の顧問役に天下りしたが、業績に対しては可もなく不可もない感じで貢献した。早々に軍を退役したこともあり、他の僚友に比較して表に登場することは少なかった。珍しくジャーナリストのインタビュアーに答えた際は以下のように述べている。

「本当に軍司令官と呼べる人物は、リン・パオ以外にいなかった」

会戦前、エルステッドはリン・パオが総司令官に就任したことを聞かされた際に天を仰いだと言われている。会戦中に総司令官に対する考えが改心したようだが、その理由を周囲に語ることはついに無かった。